

三つの言葉

宇佐見英治

ang mer onderu reeds b
chte ens uitwist. We hard n
fil ertussen in de hoop ligging midtag va
acht duu maximaal luur rip
extr wel uitstek allen met sp maz
vanaf kunt end uitgevoerd. Apo par con
afgehaald e zēnmalig f lid ast
parkeerlegenheid e gastvrouwen: bloterik penbaa hee
entreeg aal Wie geen enkel be oigens oof grip ev
atu Gel inrichting erbaast het over
kig waar noe
maa
daar waar hij be ruk
aten meevoeren naa weg
eet hij niet en onbe oordeel zien
ogen waren geslo vib nieuwste fil
onze intieme ad erg weinig vrije tijd.
rend iets zij opzijkkeek en
ben soms een zeer kle luxeuze s
lichaam. Was het pote heb
En dan de dames Bij oeken mo
geschiedt voo stim is een natuurlijk te
elax ar klaar lagen, da gaan van een internationale antw
foto aangenaam mid as een gezond
gratis ange van jou schoolvakantie. Ge bestloot
adre advertentieummer ie geen enk societeit in weg n
wilt dat overdadig eten, veel roke ript U staat ver gens o

三つの言葉

宇佐見 英治

みすず書房

三つの言葉

宇佐見英治

1982年12月25日 印刷

1983年1月10日 発行

発行者 北野民夫

発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15

電話 814-0131(営業) 815-9181(本社) 振替 東京0-195132

本文印刷所 精興社

扉・表紙・カバー印刷所 栗田印刷

製本所 鈴木製本所

© 1983 Misuzu Shobo

Printed in Japan

ISBN 4-622-01582-x

落丁・乱丁本はお取替えいたします

道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、
三は万物を生ず

老子 第四十二章

目次

I

秋の眼	3
-----	---

II

声の暗い根	67
-------	----

中学生の絵日記 山口薫追悼

風知草	83
-----	----

絵日記	88
-----	----

杖	94
---	----

古都逍遙

ii

三つの言葉	174
-------	-----

IV

ジャコメッティのデッサン	187
辻まことの芸術	194
土方久功の彫刻	200

V

書斎の絵	221
十三夜	232
不眠の夜	
『谿声山色』	
黒い犬	
電話とトランプ	
質札	
マチス讃	
天の河	
木蔭の宿り	250
跋	

秋の眼

一九六八年

縁側のガラス戸の下で新聞を見ながら、昼食をしていると、眼の前の芝生の上にMさんがあらわれた。やや浅黒い顔に大きな黒眼鏡をかけて。まるで彼女自身が森のペンダントのよう。

「あ、お食事中でしたら、ちょっとそのへんを散歩してきますわ」

彼女はそう言ってたちまちいなくなる。日向にいた黒揚羽が森の闇に消えてゆく。

食後、縁側に上ってもらい、ぼつぼつと話す。彼女の初めての詩集ができたので、はるばる届けに来たのだという。「Sさんをお誘いしたら、一緒に来るとっていたのですが、

集金日にあたって、やはり来れないということ……」

艶消しの海いろの帙に入った詩集。表紙には薄い青の長方形で枠をとり、その中に銀色の空押しで表題が入っている。「原稿で見せてもらったときより、活字になるとよく見えますね」

私はばらばらと頁をめくる。

「きれいな装幀ですね」「そうなんです。Sさんもいっておりましたが、Sさんの出版社で出した本のなかでは、いちばんよくできた装幀だと……」 だれもない家の中で一時間も卓をはさんで向きあっていたが、なぜか話がはずまない。まるで池の上に浮いた二つのコルクのようだ。風にあふられてどうしたはずみかで接触し、うなずきあうが、また遠くに離れてゆく。離れてしまうとじっさい以上に遠く思われ、無理に近ようとすると波紋がふくらむ。(どうして彼女と向きあっていると、こうなのだろう。知りあってもう十数年にもなるのに。おそらく彼女も私と同じことを考えているのだろう。それともいま読んだ彼女の詩の印象がコルクを感じさせるのだろうか。) 彼女は片手で机の下においたハンド・バッグをもう引きよせている。昨日、当地に来て、谷間のAホテルに投宿しているのだという。去年は十二月にも来て、ここで年を越した。「だれも泊っていないくて、宿には私ひとりでした。

宿の人がとっても親切で……」彼女はそういう。

「こんなもの、お使いにならないかもしれないかもしれませんが……」彼女は起ちぎわにそういつて、指でつまめるくらいの小さな紙包を机上においた。

「そこまで送りましょう」といつて、一緒に外に出たが、私はどうしてか元氣がない。林の中をしばらく歩いて、引き返した。

帰ってから紙包を開けると、なかから大きな真珠のネクタイピンが出てきた。その夜、私は貧血を起して倒れた。

朝、村のK医院にゆく。医院は街道のガソリン・スタンドのさき、電気会社の新築の事務所裏手にある。こういうと、いかにもここが聚落のようにきこえるが、溶岩がごろごろした空地に飯場のような人家がちらほら見えるだけで、その後方には林と遠くまで開墾された畑がつづいている。空がむやみと眼につく。医院はもとは部落の集会場か農具置場であったのだろう。古ぼけた長い板張りの小屋が短い渡廊下につながれて平行に建っている。入口に墨の消えかかった表札がかかり、扉があげっぱなしになっていた。「ごめん下さい」と奥の方にむかって呼ぶと、白髪まじりの奥さんが出てきた。「御診察ですか。ではこちらに」彼

女はそういつて、あっといふまに姿を消す。

冷えた薄暗がり顔が顔を包んだ。玄関にすぐつづいた渡り廊下を右に曲ると、そこが待合室で、というよりは昔の小学校のような広い廊下で、その窓ぎわに真鍮製の折疊椅子が六脚並べてある。突き当りには荒畳が二枚かさねてあった。多分怪我人はそこに寝かされて診療を待つのであろう。

「さあさ、お待たせしました。こちらへどうぞ」 K医師はもう七十歳をこえた老翁で、茱萸のように赤い小さい眼をしている。白くなった長髪を後ろに垂らし、風のように微笑んで、まず自分から椅子に腰をおろした。小柄だが、足腰ががちりして、顔には火成岩のような艶がある。

私は病状をのべる。(いくらか莊重に裁判の証人席に立ったように。) ゆうべ、眠りぎわ、蒲団の中で本を読んでいたら、急に活字が動きだして目眩みがしてきた、その後ちょっと頭を動かしても、まわりが揺れるので眼をつむっていた(私は頭を枕に固定して足で足をもみ、手でからだじゅうを擦った)、自分ではただの貧血だと思うが、そういう症状が一週間前にも起り……そのときは鏡に向って髭を剃っているときで、くらくらしとして崩折れた、大したことはないと思うが、いま森の中に独り住んでいるので、ぶっ倒れてもだれも呼べない状態

ですから……私はそんなことをぼそぼそ話した。

医師は血圧計をとり出して、ゴムのチューブを私の腕に巻いた。「お年はいくつですか、ふむ、この血圧計は最近のものです。心配はありませんね」それから私をベッドの上に仰向けさせ、胸に聴診器をあてた。私は雲を見ている思いで胸の上に近づいてくる老医の顔を見る。眼が鋭く光る。

「鼓動はいいが、心音がちょっとはつきりしませんね。何、心配はないでしょう。東京へ帰らなくとも。心臓の薬をあげておきましょう。十日も飲めばよくなるでしょう。一粒ずつ、そう、朝十時、三時、それから寝る前に……」

私はほっとして、やや元気な足どりになって山道を帰る。ゆうべはすべての未来が閉ざされた思いがしたものだ。（もう一人で山中にいることも、旅行もできなくなったら——）私はMさんを引きとめ、泊ってもらえばよかったのと思ひ、それからあんなに自分が無愛想であったのもこのためであったのかもしれないと思った。

あの医師の顔は山にそっくりだ。雲の下を歩きながら、私はさっきの老医の風貌を思い浮べた。K医師はリュックを背負って、徒歩で往診にゆく。山中で、朝昼山ばかりを見ていると顔そのものが山のかたちになってゆく。人は自分がたえず注視するものに似てくるという

考えをカロッサが書いている。向日葵が太陽の形に似ているのも同じ原理が働いているのだ。雲ばかり見ているうちに私は漂白されていなくなるかもしれない、私はもう余裕をもってそんなことを思った。

芝生のはじの鉄色に錆びた羊歯の群を見ながら、ガラス戸の下で、いまこの日記を書いている。淡い回復期のような気持。ときおり光が向いの林にあふれる。光の粒がきらきら弾み、黒い枝葉がゴブランを織る。ゴブランのなかで森の侏儒が顔を洗っている。しかししばらく思いに耽っていると、光は音もなく引きあげてしまう。非常に遠くへ消え去った野犬のように。紋白蝶が霧のおりた芝生の上を飛んでゆく。まだ陽があるというのに木々は阿片を吸ったように煙り、枝は睡そうな眼を垂れる。

新聞によると、ドブチュクはついに譲歩し、チェコではソ連の威嚇にもとづいて、内閣が改造されようとしている。チェコ人は口を緘してふたたび屈辱の長い冬を耐え忍ばねばならない。咽喉に出かかった言葉を押し戻し、圧政でないかのように諾い、卑近な日常に紛れこ

まねばならない。壁、食器、家族、犬、地上の風景、そういうものを一層敬虔にうけとり、受苦によって光の再来を待ち受けなければならない。人間のうちに身妊られた自由の火がいつか圧政を焼き払う日まで、ひそかに眼と眼によって、しめしあわさねばならない。

いかなる思想も、掛声も、言葉も、彼らをいま現実に救い出すことはできぬ。地上に不正を告発する何億という証人がいるのに、権力の驕慢を排除しえぬもどかしさ。世界の眼が見守るなかで、白昼堂々とこのようなゆすりが行なわれること。私自身がいま何ひとつ手をかせぬもどかしさ。同情が何になるというのか？

凌辱されたのは、敗れたのは、チェコの民衆だけではなく、私自身でもあるのだ。

人間の社会が進化するためには、一時的な退行がやむをえないとしても、犠牲が大きすぎる。(いづれにせよ、われわれは召される。いや、召されるのではなく、召し捕られる。私はそれを諾うことができる。しかし、問題はこの逆行があまりにも古代的にすぎることだ。)今夜私はしきりに、ゴヤの眼(「カブリチョイス」や「戦争の悲惨」を描いた眼)を思う。またテイヤール・ド・シャルダンの眼が思い浮ぶ。

見殺しにしながら、決して見失わぬこと。それこそ見るということの冷酷さであり、偉大

さだ。女々しい人間には、見ることのこの秘義がわからない。というのも見るということとはひたすら耐えること、決して屈服しないことなのだから。

今朝は晴れた。病氣見舞に来てくれた妻をバスの停留所に送ってゆき、手を振って別れた。空は秋を醸す酒庫だ。空のなかで働いている酒造りの手が見える気がする。

午後、村の郵便局から作曲家のYさんに電話したら、すぐなつかしい声がきこえてきた。「それが、どうも、今朝そちらへ手紙を出したのですが、経済的にピンチになって、うかがえないんですよ。彼女、ロシアの芝居にゆくとかで」作曲家の相も変らぬ *passion* に胸をつかれる。Yさんの心の火災が電話で伝ってくるようだ。私は、そういえばソヴェエトの芸術座の一行が来日していたことを、遠い国の話のように、思い出す。

白絹を引き裂いたような雲がかかっている。空は母の肌のように深く、幼い日の夢が眼をさます。天の舞姫の裳裾が見えるようだ。